
S.D.F.ZERO ? 1.5

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S · D · F · N E R O ? 1 · 5

【NZノード】

NZ89390

【作者名】

K · h e l l

【あらすじ】

S · D · F · N E R O ? の一ヒマルとジバキのショートストーリー。バイオロイド、クリーチャー、大地震の三つのキーワードが重なるとき世界は終焉へと向かうのであるつか。

2008・6・25>

罪を背負わされて生きる。覚醒からすぐ私はこの時間帯を把握したが、それより私たちの身体が水中にあることに危機を感じた。水没でデータがどんどん失われる。ルイの身体と私は別々になっていた。そして彼女は気絶しており、その身体は底へ向かつて沈んでいた。

『おい、死んでしまつぞー！馬鹿か！！起きる、ルイ！…』

気が動転する私の上の水面から、誰かの腕が見えた。ルイの身体を抱きかかえると影は浮かび上がった。ナイスガイ。

ルイの身体は、例の帝国人民軍の救命船に上げられた。帝国軍の災害救助船だ。私は息を殺して、必死に状況を把握した。全く持つて理解できない。ルイは何故中国にいるんだ。それもここは南京だ。

その彼は少しばかり面影があった。突然氣絶するルイに接吻…いや、ただの人工呼吸か。彼は紛れもなく、ツバキ青年だった。ルイはどうやら頭部から出血していて生命の危機だ。このアホ皇子はルイの頭を動かそうとしたのだ。

「この馬鹿野郎！ルイは頭部から出血しているんだぞ！…」

ツバキは私を見て、驚いた目でこくこく頷いた。ルイと私たちはすぐ様、帝国軍のヘリで近くの総合病院まで運ばれた。そして今、彼女は集中治療室だ。

ツバキは祈るようにして待っていた。だが、私は彼の汗と手の内の

生温かさに耐えられなくなつた。このまま祈る手に握り殺される。

「おい、私を握り殺す氣か！出せよ……」

「やっぱり、空耳じやないね。しかも日本語だ。君が僕にあの子を助けるように声を上げてくれたんだね」

ツバキは手のひらを広げ、私に疲れたヒトらしい微笑みをくれた。ルイの首から外された私は六芒星のペンドントに身をやつしていた。これが裁きだ。それにしてもこの時代のツバキは、らしくない草食系男子だ。がつかり？いや、何か裏がありそうだと逆に身構えたよ。

形式上、私は礼を言った。

「私の主の代わりに言つ。助けてくれて、ありがとう」

「そう…これで良かつたのかな」

なぜか彼はひどく落ち込んでいた。励ますべきか悩んだ。

「大丈夫だ。主人は強いヒトだ」

ルイの容体が落ち着くまでツバキと話し合わなければいけない。ここではお互に未知との遭遇だからな。しかし、私の知るツバキとは氣後れするくらい性格が真逆だ。さて、どうしたものかな。

「そうか、こちらこそ。本当は音信不通の妹を助けるため、日本の大阪に行きたかったんだ。でも南京の水害を聞いて、居ても立つてもいられなつてね。家族より人民の命を選んだことに自身がないよ。僕には力が無さすぎる…」

じぽいほど手のひらから水泡が浮かびあがる。自身がない分、ひどくお人好し。私には彼の心がさざ波立つていて思えた。今はそつとしておこう。私たちはそれぞれ複雑な思いでルイの無事を祈った。

To be continue... S · D · F · ZERO (?) - (?)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8939o/>

S.D.F.ZERO ? 1.5

2010年11月17日03時17分発行